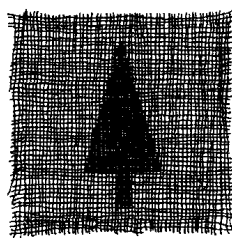




いのちのかたち



思いがけない話 〈ちくま文学の森6〉

一九八八年三月二十九日 第一刷発行
一九八八年四月二十五日 第二刷発行

編者 安野光雅（あんの・みつまさ）

森毅（もり・つよし）

井上ひさし（いのうえ・ひさし）

池内紀（いけうち・おさむ）

発行者 関根栄郷

発行者 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八 ㊟二〇一九一

電話東京二九一七六五一（営業）

二九四一六七一一（編集）

振替口座東京六一四二二三

装本 安野光雅

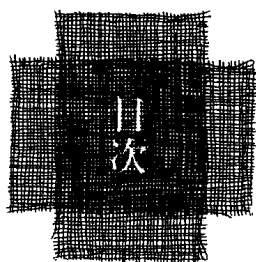
印刷所 三松堂印刷

製本所 鈴木製本

本書の定価はカバーに表示しております。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

©M. ANNO T. MORI H. INOUE O. IKEUCHI
1988 Printed in Japan
ISBN4-480-10106-3 C0393





夜までは

.....

室生犀星 2



改心

.....

O・ヘンリー 大津栄一郎訳 5

くびかざり

.....

モーパッサン 杉捷夫訳 21

嫉妬^{しつと}

.....

F・ブウテ 堀口大学訳 39

外套^{がいとう}

.....

ゴーゴリ 平井肇訳 61



煙草^{たばこ}の害について

.....

チェーホフ 米川正夫訳 115

バケツと綱

.....

T・F・ポイス 龍口直太郎訳 125

エスコリエ夫人の異常な冒険ぼうけん

蛇じやがんそう含草

あけたままの窓



魔術まじゆつ

押絵おしえと旅する男

アムステルダムの水夫

人間と蛇へび

親切な恋人

頭蓋骨ずがいこつに描かれた絵



P・ルイス 小松清訳 …… 139

桂三木助演 …… 157

サキ 中西秀男訳 …… 173

芥川龍之介 …… 181

江戸川乱歩 …… 197

アポリネール 堀口大学訳 …… 227

ビアス 西川正身訳 …… 239

A・アレー 山田稔訳 …… 253

ボンテンペルリ 下位英一訳 …… 259

あだうち
仇討三態

.....

菊池 寛

.....

275

こはん
湖畔

.....

久生十蘭

.....

307

砂男

.....

ホフマン

種村季弘訳

.....

351

雪たたき

.....

幸田露伴

.....

409



物語について

解説にかえて

森 毅

.....

464

思いがけない話

夜までは

室生犀星
むろう さいせい

男といふものは

みなさん　ぶらんこ・ぶらんこお下げになり

知らん顔して歩いてゐらつしやる

えらいひとも

えらくないひとも

やはりお下げになつてゐらつしやる

恥づかしくも何ともないらしい

お天気は好いしあたたかい日に

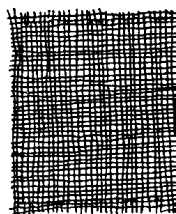
ぶらんこさんは包まれて

包まれたうへにまた叮嚀ていねいに包まれて

平気で何食はぬ顔で歩いてゐらつしやる

お尋ねしますがあなた様は今日は何処で誰方にお逢ひになりました街にははるかぜ　ぶらんこさんは上機嫌でうたつてゐらつしやる

改心



0・ヘンリー
大津栄一郎訳

オー・ヘンリー O Henry 一八六二—

九一〇 本名ウィリアム・シドニー・ポーター。アメリカのノースカロライナ州に生まれる。叔父の薬局で働いたのち放浪生活。テキサスに落ち着いて銀行に勤務中、公金横領の罪で訴えられ、南米に逃亡。その後、妻の死に際して帰国、裁判を受けて五年の刑に服す。服役中に小説を書き始め、出獄後、ニューヨークで作家として大活躍。作品はほとんど短篇小説ばかりで、数百に及ぶ。「改心」は短篇集「運命の道」中の一つで、一九〇九年作。

(原題 A Retrieved Reformation)

ジミー・ヴァレンティンが刑務所の靴工場^{くつこうじょう}でせっせと靴の表甲^{めがね}を縫^ぬっているところに、看守が来て、彼を表側の事務室に連れていった。そこには刑務所長が待っていて、その日の朝知事が署名した赦免状^{しゃめんじょう}を彼に手渡した。ジミーは待ちくたびれたような態度で受け取った。四年の刑期のうちもう十カ月近くも服役していた。彼は長くても三カ月ぐらいはいっていればすむものとふんでいたのだ。ジミー・ヴァレンティンのようにしゃばに友だちの多い人間は、「ムシヨ」にはいっても、髪^{かみ}を短く刈^かるまでもないはずだった。

「それで、ヴァレンティン」と刑務所長は言った、「お前は明日の朝出所することになる。気持を引きしめて、真人間になるんだぞ。お前は心底からの悪人じゃない。金庫破りなどやめて、まっとうに暮すんだ」

「私ですか？」とジミーはびっくりして言った。「私は生れてこのかた金庫破りなんかした覚えはありませんよ」

「ああ、そうだな」と所長は笑った。「もちろん、ないだろうな。だがはてね。お前があのスプリングフィールドの件でぶちこまれることになったのは、なんのためだったかね。だれがお偉^{えら}がたの信用を傷つけるのが恐いから、アリバイを証明したくないからだったのかね？ それともお前に根を持っている、卑劣^{ひれつ}な、老いぼれの一陪審員^{はいしんいん}のためだったのかね？ お前

たち無実の被害者の場合はきまつてそのどちらかだからね」

「私ですか？」とジミーは相変らずしらっばくれて言った。「ねえ、所長さん、私は生れてこのかたスプリングフィールドなどに行つた覚えはありませんよ」

「クローニン、こいつを連れて行け」と所長は微笑した。「そして出所用の服をあてがつてやれ。明朝七時に監房から出して、留置場の方に連れてきてくれ。なあ、ヴァレンタイン。私の忠告をよくかみしめた方が身のためだぞ」

翌朝七時十五分にジミーは刑務所長の執務室に立つた。彼は、強制収容の客が釈放のとき州から支給される、体に合わない既製服を着て、きゅっきゅつ鳴る堅い靴をはいていた。

書記が彼に一枚の鉄道切符と五ドル紙幣を渡した。法律はそれでもつて、彼が善良な市民に更生して、富裕に暮してゆくことを期待していた。刑務所長は彼に葉巻を一本くれて、握手した。九七六二号囚ヴァレンタインは記録簿に「知事によつて赦免」と記入され、ミスター・ジェイムズ・ヴァレンタインとして陽光のなかに出ていった。

小鳥の声にも、そよぐ木々の緑にも、草花の香りにもまるで動かされないで、ジミーはまっすぐレストランをめざした。そこで、彼はチキンの焙り肉と白葡萄酒を一本とつて——それにその後で刑務所長がくれたのよりひと品上等の葉巻をとつて——自由の最初の甘い喜びを味わった。それからのんびりと駅にむかった。駅の入口に坐っている盲目の男の帽子のなかに二十五セント玉をほうりこんで、汽車に乗りこんだ。三時間後、州境に近い小さな町で降りた。そして、マイク・ドーランという男がやっているカフェに行つて、カウンターの後

ろにひとり立っていたマイクと握手した。

「もっと早く出してやれなくてすまなかった、ジミー」とマイクは言った。「だがスプリングフィールド警察から抗議がきて、それと戦わねばならなかったんだ。それで、すんでのことで知事も見送るところだったんだ。元気かい？」

「元気だ」とジミーは言った。「おれの鍵はあるかい？」

彼は鍵を受けとると、二階に登り、一番奥の部屋のドアを開けた。なにもかも部屋を出たときのままだった。床にはいまでも、刑事たちがジミーを取りおさえて逮捕したときに、あの名刑事ベン・プライスのワイシャツのえりからちぎれたカラー・ボタンが落ちていた。

ジミーは壁から折りたたみ式ベッドを引き出すと、壁の羽目板を一枚はずして、奥から埃をかぶったスツケースを引きずり出した。そしてそれを開けて、東部でふたつとない見事な泥棒道具をいとおしそうにみつめた。それは特別製の鋼鉄でできた完璧な道具一式だった。最新型のドリル、ペンチ、曲り柄ドリル、組立てかなてこ、やっこ、木工ぎり。それにジミー自身が発明したご自慢の新式の道具も二、三あった。同業仲間のためにこういうものを作っているところで作ってもらうのに、九百ドル以上もかかったものだった。

半時間後、ジミーは階下に降りてカフェを出て行った。いまは体にびったり合った趣味のいい服を着て、片手には埃をはらった例のスツケースをさげていた。

「なにか仕事かい？」とマイク・ドーランが愛想よく訊いた。

「おれが？」とジミーは当惑したような口調で言った。「おっしやることがよく分らんよ。」

おれは無職にきまっているじゃないか」

このせりふがマイクにはたいへん面白かったので、ジミーはその場でミルク入りソーダ水を一杯飲まねばならぬことになった。ジミーはぜったい「強い」飲物には手を出さなかったのだ。

九七六二号囚ヴァレンタインが釈放されて一週間後、インディアナ州リッチモンドで鮮やかな金庫破りがあったが、犯人の手がかりはまったくなかった。盗まれたのはぜんぶでわずか八百ドルたらずだった。それから二週間後、ローガンズボートで特許改良型の盗難よけの金庫が手もなく開けられて、千五百ドルの現金が盗られた。証券類や銀貨は手つかずだった。この事件で初めて警察は関心を持った。つづいてジェファソン市の銀行の古風な金庫に穴が開けられて、そこから五千ドルもの紙幣が消えた。こんどは被害が大きかったので、事件がベン・プライスのところに廻ってきた。事件の報告書を比較してみると、金庫破りの手口にはっきりした類似性が認められた。ベン・プライスは盗難の現場を検証して、こう言った。

「これはダンディのジム・ヴァレンタインの仕業だ。奴がまた仕事を始めたんだ。あのダイヤルを見るがいい——まるで雨の日にラディッシュを引き抜くみたいに手もなく引き抜いている。こんなことのできるやつとこを持っているのは奴だけだ。それにあの銃の槓桿がきれいに穴を開けて抜かれているのを見るがいい。ジミーの奴はいつだって穴を一個あけりや十分なんだ。そうだ。ヴァレンタイン先生をあげなきやいかんようだな。こんどこそ、刑期短縮とか恩赦とか馬鹿なことをさせないで、たっぷり刑期をとめさせてやる」